

学生災害ボランティアの課題抽出と実践

社会環境工学科 大本照憲

1. はじめに

自然災害が発生するには、自然現象であるハザード (Hazard) の生起に加えて、被害対象となる人口、資産 (Exposure) が存在し、さらに自然外力であるハザードに対する防災力の脆弱性 (Vulnerability) の3条件の存在することが指摘されている。ハザードに関しては地球温暖化を背景とする気象災害外力の増大が懸念され、土地利用形態の歪みは被害対象の人口や資産を増大させ、自然災害に対する住民意識の希薄化や中山間地における少子高齢化は防災力の脆弱性を生む。本報告では、災害復旧において重要な役割を担う共助としての学生災害ボランティアの現状と課題について検討した。なお、本研究では川内川流域の住民を対象とする大規模な災害アンケートを実施することにより流域住民の災害意識構造を明らかにし、洪水危機管理システムの構築を図り、ソフト対策として防災力の強化を図ることも目的としている。

2 学生災害復旧支援団体「熊助組」の活動履歴

図-1は2007年7月21日付けの熊本日日新聞に掲載された熊大学生ボランティアの記事である。7月17日から26日にかけてボランティアとして社会環境工学科から熊本県美里町に派遣された学生は19名で、延人数は39名であった。美里町社会福祉協議会および地元NPOの協力によりボランティア活動は充実したものとなり、地元の被災者から喜ばれると共に、学生には貴重な体験となった。以下に学生災害ボランティア組織の主な活動履歴を示す。

平成19年度学生災害復旧支援団体「熊助組」活動履歴

- 6月25日 学生災害ボランティア(熊助組)の発足会
- 6月26日 地域防災セミナー
 - ・リスクコミュニケーション
 - ・緊急時の官民連携をどうするか?
- 7月9日 熊本市ボランティアセンター講演
 - ・自主防災クラブの現状と取り組み
 - ・ボランティアの心得
- 7月17日 熊本県美里町洪水土砂災害における復旧～
～26日 ボランティアの実践
- 8月31日 土木学会東京支部「山水会」での活動内容
の発表
- 9月7日 「九州川のオープンカレッジ in 山国川」
～9日 に4名参加に参加し講習を受ける
- 11月3日 熊粋祭工学部探検でのパネル展示
- 11月24日 「ぼうさいカフェ in くまもと」への参加
- 12月1日 「火の国防災塾エキスパート in 葦北」～
2日 の参加
- 12月1日 「第7回九州川のワークショップ in 別府」
～2日 に4名参加

3. おわりに

著者は、学生を連れて平成19年2月8日に鹿児島県さつま町湯田コミュニティーセンターにおいて災害ボランティアの受け入れを行ったNPO関係者、公民館長、民生委員、地区役員に対して川内川水害に関するヒアリング調査を実施した。その中で、避難情報の伝達やハザードマップに関する不備、さらに災害ボランティアの災害復興における重要性が指摘された。さらに、高齢者の場合には災害ボランティアの社会的認知度は低く、初期の段階では遠慮していた様だが、次第に信頼関係が増し、ボランティアのニーズ件数が増加したとのことであった。平成19年度に熊本大学工学部社会環境工学科では、学生災害ボランティアの組織化を図り、災害復旧活動補助、防災演習、防災教育に取り組み、熊本県美里町において貴重な経験を得た。現在、学生組織、NPO および行政機関の間の連携を高めるための情報交換が必要となっている。

図-1 学生災害復旧支援団体「熊助組」の掲載記事
(2007.7.21)